opusdei.org

聖ホセマリアの生涯 - 45

思いもよらない迫害の中で、 聖ホセマリアには気にかかっ ていることが一つありまし た。それはオプス・デイの女 子部のことでした。

2024/04/29

過去の記事はこちらから

思いもよらない迫害の中で、聖ホセマリアには気にかかっていることが 一つありました。それはオプス・ディの女子部のことでした。女性の指 導の場をほとんど告解場だけに限っていたこともあり、この仕事はなかなか進みませんでした。内戦の前にメンバーになった女性もほんの僅かだったうえに、内戦中の長期にわたる孤立のため、その人たちもオプス・デイの精神を失い、戦後は別の道を進むことになりました。女子の仕事は振り出しに戻ったのです。

女性にオプス・デイの精神にそった 養成を与える仕事に、聖ホセマリ 真とお姉さん(ドローレス夫人。 真)とお姉さんの協力を頼み、たの協力を 見とお姉さんの協力を 引き受けました。 は喜んでそれを引き受けまし神 ないな指導をするのは神 ないなおが、オプス・デイに 固有の家事と はった。 ないることに 対した。 ないることに がありました。 ないるとに がありました。 ないました。 ないました。 この頃聖ホセマリアは司祭の黙想会の指導のため頻繁にマドリードを留守にしていました。1941年4月にはスペイン東部のレリダに行く予定がありました。その頃、お母さんが風邪を引いたのですが、それほど深刻には見えなかったので、神父は寝込んでいる母親に病気の苦しみを黙想会の実りのために捧げて欲しいと言って出発しました。

それから24時間後、ドローレス夫人 の容態は急激に悪化した。母が最期 の苦しみと闘っていた頃、レリダで は息子が司祭を相手に「司祭の母親 の役割 についての講話をしていま した。その講話が終わったときマド リードから訃報が届いたのです。お 御堂に入って祈り、子どものように 泣きました。悲しみの中で、神が最 善のことをされたという信仰は揺る ぎませんでした。あのとき以来、神 父はこう考えていると言っていまし た。自分が教区の司祭のために全力

を傾けて働いているまさにそのとき 神が母親をお呼びになったのは、ど れほど自分が司祭を愛しているかを はっきりと示すためだ、と。

すぐマドリードに帰って遺体と対面 し再び涙を流した後、母の最期についての説明を受けました。神はみんな取って行かれると不平が口をついて出ました。しかし、今はドローレス夫人が天国から自分の司祭としての仕事を応援してくれるとの確信がありました。

尾崎明夫

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-45/(2025/12/14)